

仲間とともに書く「自分史」

—過去と現在を見つめ直し、将来を考える—

森元 桂子・遠藤 ゆう子

科目名：自分史を書く

レベル：初級1・2／中級3・**4・5**／上級**6**・7・8

履修者数：10～20名

1. これまでの経緯と本科目における「自分史」

本科目は2010年度に鈴木由美子・狩野倫子両氏によって始められ、その後、森元と遠藤が順に引き継ぐ形で今日に至っている。その間、活動の内容や方法は様々に改善を行ってきたが、活動の趣旨・目的と週3コマ×15週という形態は変えずに実践を続けてきた。若い世代の学生たちにとって、今後の生き方や選択のために自分が何者かを知ることは非常に重要であり、最大の関心事であるとも言える。そのため、この科目では「自分史」を、過去と現在の自分を見つめ直し、未来の生き方を考えるためのものと捉え、執筆と読み合い・相互評価の活動を行う。それは将来への志向という点において、年を重ねた人が人生の集大成として書く自分史とは異なる。具体的には、履歴書のような自分史ではなく、本人の興味や関心、今の自分に至るのに柱となった過去の物事や影響を受けた人等を参考に一人一つのテーマを決め、それに沿って過去の出来事・経験、心情等を整理し書いていく。

2. 活動の目的—仲間とともに「自分史」を書く

この活動の目的は自分の生き方・考え方を捉え直し、今後の在り方について考えることにあるが、筆者らはこれを教室活動として仲間とともに行うことに、より大きな意味があると考えている。なぜなら、お互いの「自分史」を読み合い、語り合うこと、またそれにより自分とは異なる道を歩んできた人の生き方・考え方に触れることは、自身の人生を新しい視点で捉えることにつながり、より深く自身の価値観を見つめることを可能にするからである。また、表現の面においても、自分が伝わるつもりで書いた表現が、必ずしも他の人に正しく理解してもらえないとは限らないことを体感することになるため、どうすれば伝わるかを共に考えながら、よりよい表現の方法を検討することになる。本科目ではこのような形で日本語の文章力の向上を図ることを目指している。

3. 活動の概要

①「自分史」のテーマを見つける：自身に内在するテーマは、実は自分でも意識化することが非常に難しいものだが、「自分史」においては、このテーマの模索と発見が重要な鍵となるため、

「本当のテーマは、実は自分でもわからない」という前提に立ち、丁寧なブレインストーミングを行う。その方法は、まず「人生のトップ5ニュース」「私に影響を与えた人」等のトピックでキーワードを挙げ、自分のことを語って話し合い、次にそのキーワードを使ってマップを作り、大事な部分を見つけるといふものである。また、過去から現在の充足度の変動が可視化できるライフラインチャートの作成も併せて行う。こうした活動を通して学生たちは過去の多様な記憶を掘り起こし、テーマを見出していく。以下に、これまでの学期における「自分史」のテーマ例を挙げる。

表1 「自分史」テーマの例

私の居場所とアイデンティティ	先生から受けた大きな影響	私にとって日本留学とは何か
私とお父さん	音楽と私	世界を広げるボランティア

②「自分史」を書く：各自が決めたテーマと作品構成で少しずつ自分史を書き、提出する。授業ではグループ全員で一人ひとりの自分史を読み、コメントし合う。具体的には、内容や表現に関する質問・助言、共感する点、類似/相違の経験等を話す。話し合い後は、グループ活動で感じたこと等を「振り返りシート」にまとめる。もらったコメント等を参考に加筆修正を行い、書き進めることを宿題とし、読み合いと執筆を繰り返して完成する。

③相互自己評価：本科目では「自分史」を学生同士がお互いに評価するため、執筆期間の後半に皆で話し合って評価項目を決める。完成したお互いの「自分史」を丁寧に読み、項目に従って評価シートを記入し、「相互自己評価会」を行う。

④文集作成・将来を考える：評価コメントに基づいて最終修正を行い「自分史」の文集を作成する。また、これまでの活動をふりかえり、「将来マップ」を作成して今後の自分の在り方について考える。

4. 成果と課題

この科目における最大の手ごたえは、学生間につらい過去や負の部分までを腹を割って書き話せる関係性が構築されることと、各々が安心できる居場所とも言える場を得られることである。目の前には常に自分の大事な経験や思いに真摯に耳を傾けてくれる仲間がおり、一人ひとりの人生に敬意をもって向き合う時間がある。彼らの年齢や留学中という特別な状況を考えた場合、それは自身と自分の将来をじっくりと考える機会として大変に貴重なものだと言える。「自分史」活動を通し、それまで目を背けていた過去の記憶に新たな意味づけをし、今の自分を形成するのに必要なものだったと肯定的に受け入れ、将来への自信を持たせた者もいれば、人間一人の持つ物語の重みに気づかされ、他の人の存在を尊重するようになったという者もいる。「自分史を書く」が「書く」授業である限り、日本語の語彙・表現力の向上も勿論大切だが、担当者として、人と人がことばでやりとりする意義は何か、日本語教育の立場でできることは何かをよく考えながら、彼らの留学後の「自分史」にまで意味の残る活動が展開できるよう、今後も努力と工夫を重ねたい。

(もりもと けいこ, 早稲田大学日本語教育研究センター)

(えんどう ゆうこ, 早稲田大学日本語教育研究センター)